トゥレット症候群における衝動性の構造的特徴

—主観的衝動への着目による検討—

○藤尾未由希^{1, 2}・金生由紀子² (非会員)・下山晴彦¹

(¹東京大学大学院教育学研究科・²東京大学医学部附属病院)

キーワード: トウレット症候群, 衝動性, 主観的衝動

Structural Features of Impulsivity in Tourette Syndrome

Miyuki FUJIO^{1, 2}, Yukiko KANO² and Haruhiko SHIMOYAMA¹

(¹Graduate School of Education, Tokyo Univ., ²The University of Tokyo Hospital)

Key Words: Tourette Syndrome, impulsivity, subjective urge

背景

トゥレット症候群 (Tourette Syndrome: 以下, TS) とは, 運動チックと音声チックを有する慢性的なチック障害である。TS を有する人々は衝動性が臨床的に問題になることがしばしばあり, 衝動性には「表出される行動 (例. 怒り発作)」と「行動に現れる前に生じる主観的衝動 (例. 前駆衝動)」という 2 つの側面がある。これらはいずれも TS 本人及びその家族に苦痛や困難を引き起こすと言われている (Frank et al., 2011)。

しかし, TS を有する人々がどのような主観的衝動をどの程度感じており, そうした主観的衝動の感じ方が定型発達者とどのように異なるかという, 主観的衝動の構造的特徴は明らかではない。そこで, 本研究では, 主観的な衝動を測定する尺度を作成し (研究 1), TS を有する人々と定型発達者の主観的衝動の差異を検討する (研究 2) ことを目的とした。

研究 1

目的 どのような主観的衝動をどの程度感じているか測定する尺度を作成し, 尺度の信頼性・妥当性の検証を行う。

方法 参加者: 大学 (院) 生 504 名から有効回答を得た (男性 196 名, 女性 308 名, 有効回答率 89.7%)。参加者の平均年齢は 20.26 歳 ($SD = 1.96$) であった。手続き: TS 患者 3 名及び大学院生 2 名に予備調査を行い, 48 の尺度項目を作成した。質問紙の構成は, デモグラフィック項目, 著者ら作成の尺度項目および日本語版 Barrat Impulsivity Scale; Someya et al., 2001) であったⁱ。なお, 本研究は, 東京大学医学部倫理委員会の承認を得て行った。

結果と考察 探索的因子分析の結果, 主観的衝動は, 「新奇刺激希求への衝動 (13 項目)», 「他者やものに対する攻撃衝動 (11 項目)», 「身体感覚を伴う衝動 (7 項目)」の 3 因子からなることが示された。また, 因子モデルの妥当性および信頼性について高い値が示された ($GFI = .98$, $AGFI = .96$, $CGFI = .99$, $RMSEA = .05$; $\alpha \geq 0.76$)。BIS-11 との相関係数は $r = .36$ ($p < .01$) であったことから, 衝動性という同一の現象を捉えながらも, 異なる側面を測定する尺度であると考えられる。

研究 2

目的 研究 1 で作成した尺度を用いて, TS を有する人々と定型発達者の主観的衝動の構造的差異を検討する。

方法 大学 (院) 生 (以下, 健常群) および A 病院に通院中の TS 患者 (以下, TS 群) が調査に参加した。健常群は 33 名 (男性 24 名, 女性 9 名) で, 平均年齢 22.33 歳 ($SD = 3.06$) であった。TS 群は 19 名 (男性 12 名, 女性 7 名) で, 平均年齢 25.68 歳 ($SD = 6.58$) であった。調査手続きは研究 1 と同様であり, 分析には研究 1 で作成した尺度のみを用いた。

結果と考察 TS 群, 健常群の下位尺度得点を算出した (Figure 1)。2 要因分散分析の結果, 交互作用が有意であり, TS 群と健常群では, どの主観的衝動を感じやすいか異なることが示唆された ($F(2, 49) = 6.23$, $p < .01$)。また, TS を有する人々では, 新奇刺激希求への衝動が定型発達者に比べて弱いことが明らかになった ($p = .03$)。一方で, 他者やものに対する攻撃衝動や, 身体感覚を伴う衝動といった, TS を有する人々で指摘される衝動性 (怒り発作や前駆衝動) に密接に関わると思われるものについては, 両群で有意な差は認められなかった (順に, $p = .12$, $p = .39$)。

Figure 1 主観的衝動の下位因子別得点

総合考察

本研究の結果, 主観的衝動の量的測定が可能になり, 主観的衝動の感じ方が定型発達者と TS で異なることが明らかになった。しかし, 臨床的に指摘される衝動性と密接に関連すると予想された主観的衝動については, 量的差異は認められず, 衝動が表出されるまでのプロセスの中で差異がある可能性が考えられる。今後, 参加者の人数を増やし, 表出される行動との関連の仕方をはじめとした, TS の衝動性の構造の特徴についてさらなる検討を行うことが求められる。

引用文献

- Frank, M. C., Piedad, J., Rickards, H. and Cavanna, A. E. (2011). The Role of Impulse Control Disorders in Tourette Syndrome: An Exploratory Study. *Journal of the Neurological Sciences*, **310**, 276-278.
- Someya, T., Sakado, K., Seki, T., Kojima, M., Reist, C., Tang, S. W. and Takahashi, S. (2001). The Japanese Version of the Barratt Impulsiveness Scale, 11th version (BIS-11): Its reliability and Validity. *Psychiatry and Clinical Neuroscience*, **55**, 111-114.

ⁱ 質問紙にはその他の尺度も含まれたが, 本稿では割愛する。